

[演題5]

当院ICUにおける作業療法の取り組みについて

○浅井 康紀 (OT), 小林 正樹 (OT), 岩田 健太郎 (PT)

神戸市立医療センター中央市民病院リハビリテーション技術部

1. はじめに

ICUは、より重篤な病態や重複障害を有する患者に対し、専門分化したメディカル・スタッフの協力体制によるチーム医療を提供する場である。医療の進歩により重症患者の生存率が増えてきていることから、ICUの役割は増している。しかし、ICU退室後の患者の多くは、日常生活を送るためのADL能力に回復せず、QOLが著しく低下している場合が多い。そのため、ICUを退室した患者のQOLに目が向けられるようになってきている。また、高齢化に伴い、ICU入室患者の高齢化、重症化、疾患の多様化が進んでおり、チーム医療における早期リハビリテーション介入の効果も証明されてきている。当院では、ICUでのチームアプローチに作業療法士（以下OT）も参加し、積極的な介入を行っているので、今回はその取り組みについて紹介したい。

2. 当院の特徴

当院は、1次から3次救急までを診療するER型救命センターを擁し、神戸市だけでなく兵庫県ならびにその周囲の地域までカバーしている基幹病院である。当院には35の診療科、700のベッドがあり、そのうちの125床は重症ベッドである。また、当院では早期離床、二次的合併症の予防、業務効率向上等を目的に重症ベッドを有する各病棟に専従セラピストを配置している。救急ICU入室患者に対しては、毎朝ICU専従医師とリハビリスタッ

フが患者の状態を確認し、その日に行うリハビリテーション目標について協議を行っている。

3. 作業療法

当院には現在12名のOTが勤務しており、2015年度より救急ICUに2名、SCUに1名、脳卒中センターに1名の専従OTが配置されている。

救急ICUの専従OTは、PTとともに評価、基本動作練習、Nsとともにセルフケア動作練習、およびSTとともに代償コミュニケーション練習を行っており、多職種協働での取り組みを積極的に行っている。また、ICUにおいては、患者の趣味活動や患者本人がしたいことにアプローチしている。これにより患者の意欲が向上し、患者による主体的なリハビリテーションのための動機も高まっている。具体的にはPCやiPad操作練習、麻雀、トランプ、および習字等を他職種協力のもと実施している。

急性期における作業療法では患者の機能面にフォーカスが当たりがちである。しかし、ICUの患者を「生活者＝生活する主体」と捉え、作業にフォーカスを当てると、ICUにおいてもOTが関わる要素は少なくないことに気づく。急性期から退院後の生活をイメージし、患者の思いに耳を傾け、目標を共有し、生活を主体的に送るための「きっかけ」を作ることがICUにおけるOTの役割だと思われる。

4. 今後の課題

OTも今後ICU、急性期領域で活躍するためには、幅広い高度な知識が必要であり、フィジカルアセスメント力も求められる。それゆえ、このような知識・技術の習得が必須であると考ええる。また、急性期病院ではOTの知名度はまだまだ低いので、多職種に向けてのOT啓蒙活動も進めていく必要があるものと思われる。